

# 障害者スポーツに対する女子学生の意識に及ぼす影響

～専攻学科および運動経験の関係について～

## The Effects on the Attitudes of Female University Students to Sports for the Disabled.

～In Relation to their Fields of Specialty and Sports Experience～

角南良幸<sup>1</sup>・鍵村昌範<sup>2</sup>・下園博信<sup>3</sup>

Yoshiyuki Sunami・Masanori Kagimura・Hironobu Simozono

### 1. はじめに

障害者スポーツは、主に第二次世界大戦後のリハビリテーションプログラムからはじまり、レクリエーションスポーツを経て現在の国際的な競技スポーツへと発展してきている。競技スポーツの基礎を築いたイギリスのグッドマン博士は、障害者に対して残された能力を最大限に生かす方法としてスポーツの重要性を提唱し、パラリンピックの基礎となる障害者ための国際スポーツ大会を開催した。本邦でも、パラリンピックに代表されるような国際大会などで、障害者が様々なスポーツ種目で活躍する姿がメディアに登場する機会も増え、障害者スポーツの社会的認知度も少しずつ高まってきていると考えられる。2020年のオリンピック開催地が東京に決定した際にも、多くの報道機関が東京オリンピック・パラリンピックと併記して報道していたことからそのことが窺い知れる。

一方、学校教育現場では世界規模で障害のある子どもと障害のない子どもが共に教育を受ける「インクルーシブ教育」が広まってきている。我が国でも文部科学省初等中等教育分科会において「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」<sup>1)</sup>などで、障害のある子どもにも、障害があることが周囲から認識されていないものの学習上又は生活上の困難のある子どもにも、さら

にはすべての子どもにとっても、良い効果が期待できるとして、可能な限り双方が一緒に教育を受けられるよう配慮するように示されている。このインクルーシブ教育の理念で行われるインクルーシブ体育は、学習内容に役割分担や協力し合う場面が多いこと<sup>2)</sup>や、また、できなかったことができるようになる場面が多いことなどから、インクルーシブ教育の推進において他の教科よりもより大きな可能性を持っていることが示されている<sup>3)</sup>。これらのことから、インクルーシブ教育やインクルーシブ体育の理念は、基本的には初等中等教育を念頭に置いた教育理念であるが、大学体育においても積極的に導入すべきであると考えられる。

大学体育に障害者スポーツを導入するに当たって、大学生を対象にした障害者スポーツに関する意識調査が行われてきており、これらの調査では、専攻する学部学科によって障害者スポーツに関する意識は異なる可能性が報告されている<sup>4,5,6)</sup>。しかし、これらの報告のほとんどが男女込みの意識調査であり、女子学生の特徴について検討した報告は少ない。また、対象学科に関しても教育系学科については詳細な検討がなされていない。女性の方が障害者に対する関心や援助意欲が高いこと<sup>7)</sup>やスポーツを通じた社会的価値ある行動力が高いこと<sup>8)</sup>などから、女性の特徴についてさらに詳しく検証する必要がある。また、教育系学科では、介護等体験や障害者理解に関する科目も設定されており他学科に比し特異的な部分も多い。さらに、体育系学生の特質について報告されているものの<sup>9)</sup>、実際の運動経験との関係については検討されていない。

1 福岡女学院大学人間関係学部

2 健康支援研究センター

3 九州共立大学スポーツ学部

障害者スポーツを大学体育に導入する際、専攻学科や運動経験によって障害者スポーツに対する意識が異なるのであれば、その特徴を把握し、それに合わせた動機付けや教材の提供方法を選択する必要がある。そこで本研究では、人文系、幼児教育系、体育系学科に所属する女子学生を対象に、障害（者）および障害者スポーツに関する意識調査を行い、専攻学科および運動経験の関係について検討を行った。

尚、本研究では平成22年の内閣府・障がい者制度改革推進本部・障がい者制度改革推進会議・障害の表記に関する作業チームが発表した「『障害』の表記に関する検討結果について」における総括において、「障害」に変わる新たに特定な表記を決定できていないこと、また、その後同府に設置された障害者政策委員会において旧来の「障害」を継続使用していること、さらに障害者に関する学術研究会も現在のところ同様の対応であることから、本研究の「障害」に関する表記に関しては従来通りの表記を使用した。

## 2. 方法

### 1) 対象

対象者は、質問紙の回答に不備がなかった福岡県内のF女子大学の幼児教育系学科99名、人文系学科89名、K大学スポーツ系学科56名の女子大学1年生計244名である。全ての対象者に本研究の調査目的および結果の取扱いについて承諾してもらった後、質問紙法により障害者スポーツに関する意識調査を実施した。調査は2013年後期後半の授業で実施した。

### 2) 調査内容

#### (1) 対象者の特性

対象者の性別、年齢、所属学部学科、過去の運動経験の詳細について回答を求めた。

#### (2) 障害（者）および障害者スポーツに関する意識について

永浜ら<sup>10)</sup>が実施した障害（者）および障害者スポーツに関する意識に関する質問紙を参考にして実施した。この質問紙は、障害（者）に関する知識・印象21項目、障害者スポーツに関する知識・印象23項目から構成されている。各項目「強くそう思う（4点）」から「全

くそう思わない（1点）」の4段階評価法で行った。

#### (3) 障害者スポーツおよびアダプテッド・スポーツに関する知識・経験について

永浜<sup>6)</sup>の報告を参考に、障害者スポーツおよびアダプテッド・スポーツを知っているかどうか、知っている種目、これらの競技映像や記事の視聴・閲覧経験の有無、障害がある人と接した経験の有無について回答を求めた。

### 3) 統計処理

統計処理は、SPSS12.0J (SPSS Inc., USA) を用いて行った。障害（者）および障害者スポーツに関する項目それぞれについて、主成分法・promax回転による探索的因子分析を行った。また因子分析により抽出された因子について内的整合性による信頼性統計量を調べるためにCronbachの係数を算出した。さらに抽出された因子得点を従属変数、専攻学科を独立変数とした一要因分散分析を行い、有意な主効果が認められた要因にはTukey法による多重比較検定を行った。運動経験による分類は多岐にわたり、少人数群も多いため、運動経験の代表群として最も人数の多い中学校および高等学校時に運動系クラブに所属していた群（中高運動群123名）と過去に運動系クラブに所属していなかった群（運動歴なし群46名）の2群間について対応のないt-testを行った。

## 3. 結果

### 1) 障害（者）に関する意識尺度について

障害（者）に関する知識・印象21項目に対して主成分法・promax回転による探索的因子分析を行い、固有値が1.00以上の基準および因子の解釈可能性について最も優れた3因子を採用した。さらに因子負荷量が小さい項目（0.40未満）の項目を除き、再度同様の基準で因子分析を行った結果、最終的に3因子13項目（累積寄与率55.5%）が抽出された（表1）。第1因子は、「障害（障害がある人）に対して暗いイメージがある」、「障害がある人との交流は難しい」、「障害がある人はかわいそうだ」など、暗いイメージや、コミュニケーション困難や回避願望、悲壮感などを含む項目群であったため、「障害（者）へのネガティブイメー

表 1. 障害 (者) に関する意識尺度

因子および質問項目	因子負荷量			共通性
	1	2	3	
第1因子:障害(者)へのネガティブイメージ( $\alpha=0.83$ )				
2 障害(障害がある人)に対して暗いイメージがある	0.73	0.52	0.19	0.47
6 障害のある人との交流は難しい	0.73	0.57	0.18	0.50
3 障害のある人に対する接し方がわからない	0.71	0.47	0.20	0.45
5 障害のある人とできれば関わりたくない	0.69	0.47	0.43	0.46
4 障害のある人はかわいそうだ	0.65	0.53	0.27	0.43
11 障害のある人を特別視している	0.57	0.56	0.16	0.35
第2因子:障害による日常生活困難感( $\alpha=0.66$ )				
7 障害のある人の自立(生活)は難しい	0.54	0.70	0.20	0.43
8 障害のある人は一人では何もできない	0.50	0.61	0.28	0.34
15 障害のある人はいろいろな面で差別をうけている	0.36	0.49	-0.19	0.26
14 障害のある人の社会参加は不十分だ	0.32	0.49	0.01	0.24
18 障害は病気である	0.28	0.40	0.36	0.18
第3因子:障害(者)への理解( $\alpha=0.52$ )				
16 障害(障害のある人)の理解を深めたい	-0.13	-0.02	-0.73	0.28
21 生まれてくる自分の子どもにも身体的な障害があるとわかってでも出産を選ぶ	-0.35	-0.24	-0.52	0.26
寄与率(%)	35.5	11.9	8.1	
累積寄与率(%)	35.5	47.4	55.5	

ジ」と命名した。第2因子は、「障害がある人の自立(生活)は難しい」、「障害のある人は一人では何もできない」、「障害がある人の社会参加は不十分だ」など、自立生活や社会生活の難しさなどを含む項目群であったため、「障害による日常生活困難感」と命名した。第3因子は、「障害(障害がある人)の理解を深めたい」、「生まれてくる自分の子どもにも身体的な障害があるとわかってでも出産を選ぶ」で構成されており、「障害(者)への理解」と命名した。内的整合性の信頼性指標である Cronbach の係数は、第1因子「障害(者)へのネガティブイメージ」は0.83、第2因子「障害による日常生活困難感」は0.66、第3因子「障害(障害がある人)の理解を深めたい」は0.52であった。第2因子の係数の値は決して高くはなかったが、日常生活困難という広い概念に対して5項目で測定していることから内部一貫性は許容範囲内にあると判断し尺度として採用した。第3因子の係数は信頼性に乏しいため、尺度としての採用は見送り、専攻学科別および運動経験による比較は行わなかった。

## 2) 障害者スポーツに関する意識尺度について

障害者スポーツに関する知識・印象23項目それぞれについて、前述と同様の探索的因子分析を行った結果、最終的に4因子17項目(累積寄与率55.3%)が抽出された(表2)。第1因子は、「私は、障害者スポーツに積極的に参加したい」、「私は、障害者スポーツの観戦

に興味がある」、「私は、自分の子どもにも障害があってもスポーツさせたい」など、障害者スポーツへの興味や関心、積極的関与などを含む項目群であったため、「障害者スポーツへの興味・関心」と命名した。第2因子は、「障害者がスポーツを行うことは精神面の変化において意義がある」、「障害者がスポーツを行うことは身体的機能の向上において意義がある」、「障害者がスポーツを行うことは自立の1つである」など、障害者スポーツを行うことによる様々な効果を含む項目群であったため、「障害者スポーツ実施に対する効果認識」と命名した。第3因子は、「障害者は障害がない人とは別々にスポーツした方がよい」、「障害者は運動能力が低い」、「障害者がスポーツをすることは危険だ」で構成されており、「障害者スポーツ実施への心配」と命名した。第4因子は、「障害者がスポーツを行うには特別なルールが必要だ」、「障害者がスポーツを行うには特別な施設が必要だ」、「障害者スポーツのサポートは必要だ」で構成され、「障害者スポーツ実施に対する配慮の必要性」と命名した。Cronbach の係数は、それぞれ第1因子0.78、第2因子0.80、第3因子0.64、第4因子0.66であった。第3、第4因子の値は決して高くなかったが、広い概念に対してそれぞれ3項目で測定していることから参考値としては許容範囲内にあると判断し尺度として採用した。

表2. 障害者スポーツに関する意識尺度

因子および質問項目	因子負荷量				共通性
	1	2	3	4	
第1因子: 障害者スポーツへの興味・関心 ( $\alpha=0.78$ )					
22 私は、障害者スポーツに積極的に参加したい	0.70	0.11	-0.11	0.08	0.44
16 私は、障害がある人と一緒にスポーツをしたい	0.63	0.29	-0.21	0.25	0.40
23 私は、障害者スポーツの観戦に興味がある	0.59	0.13	0.00	0.09	0.39
20 私は、自分の子どもに障害があったら、障害がない人と一緒にスポーツさせたい	0.58	0.25	-0.31	0.25	0.43
17 私は、自分に障害があってもスポーツをしたい	0.58	0.42	-0.17	0.39	0.43
19 私は、自分の子どもに障害があってもスポーツさせたい	0.55	0.44	-0.28	0.32	0.43
18 私は、自分に障害があったら、障害がない人と一緒にスポーツをしたい	0.50	0.25	-0.36	0.22	0.42
第2因子: 障害者スポーツ実施に対する効果認識 ( $\alpha=0.80$ )					
14 障害者がスポーツを行うことは精神面の変化において意義がある	0.34	0.92	-0.16	0.41	0.77
13 障害者がスポーツを行うことは身体的機能の向上において意義がある	0.23	0.89	-0.19	0.34	0.74
15 障害者がスポーツを行うことは自立の1つである	0.34	0.57	-0.15	0.44	0.40
12 障害者は一般のスポーツ大会に参加したいと思っている	0.38	0.52	-0.33	0.32	0.36
第3因子: 障害者スポーツ実施への心配 ( $\alpha=0.64$ )					
11 障害者は障害がない人とは別々にスポーツした方がよい	-0.20	-0.13	0.63	0.03	0.27
10 障害者は運動能力が低い	-0.11	-0.09	0.53	0.06	0.23
9 障害者がスポーツをすることは危険だ	-0.05	-0.05	0.49	0.10	0.22
第4因子: 障害者スポーツ実施に対する配慮の必要性 ( $\alpha=0.66$ )					
3 障害者がスポーツを行うには特別なルールが必要だ	0.14	0.27	0.08	0.68	0.33
4 障害者がスポーツを行うには特別な施設が必要だ	0.11	0.15	0.34	0.57	0.30
6 障害者スポーツのサポートは必要だ	0.18	0.27	-0.08	0.51	0.25
寄与率(%)	25.2	12.6	10.4	7.1	
累積寄与率(%)	25.2	37.8	48.2	55.3	

3) 障害(者)および障害者スポーツに関する意識尺度における専攻学科の影響

表3に障害(者)に関する意識尺度における専攻学科別比較を示した。「障害(者)へのネガティブイメージ」( $F(2, 243) = 48.57, p < 0.01$ )および「障害による日常生活困難感」( $F(2, 243) = 21.85, p < 0.01$ )それぞれにおいて有意な主効果が認められた。多重比較の結果、いずれの項目とも幼児教育系は人文系・体育系よりも有意に高値を示し、体育系は人文系・幼児教育系よりも有意な低値を示していた。

表4に障害者スポーツに関する意識尺度における専攻学科別比較を示した。「障害者スポーツへの興味・

関心」では有意な主効果は認められなかったが、「障害者スポーツ実施に対する効果認識」( $F(2, 243) = 10.07, p < 0.01$ )、「障害者スポーツ実施への心配」( $F(2, 243) = 7.21, p < 0.01$ )、「障害者スポーツ実施に対する配慮の必要性」( $F(2, 243) = 5.58, p < 0.01$ )それぞれにおいて有意な主効果が認められた。多重比較の結果、「障害者スポーツ実施に対する効果認識」では、体育系は人文系・幼児教育系よりも有意な低値を示し、「障害者スポーツ実施への心配」では、幼児教育系が人文系より有意な高値を示した。「障害者スポーツ実施に対する配慮の必要性」では、幼児教育系は人文系・体育系よりも高値を示した。

表3. 障害(者)に関する意識尺度における専攻学科別比較

項目	人文系	幼児教育系	体育系
障害(者)へのネガティブイメージ	12.5 ± 2.8	15.2 ± 2.6 a	10.8 ± 2.9 a,b
障害による日常生活困難感	11.2 ± 2.2	12.1 ± 1.7 a	9.9 ± 2.3 a,b

平均±標準偏差, a・b:  $p < 0.05$ , a: vs 人文系, b: vs 幼児教育系

表4. 障害者スポーツに関する意識尺度における専攻学科別比較

項目	人文系	幼児教育系	体育系
障害者スポーツへの興味・関心	20.0 ± 3.2	19.6 ± 3.1	19.6 ± 3.1
障害者スポーツ実施に対する効果認識	12.5 ± 2.1	12.3 ± 1.5	11.2 ± 1.7 a,b
障害者スポーツ実施に対する心配	6.0 ± 1.5	6.8 ± 1.2 a	6.5 ± 1.7
障害者スポーツ実施に対する支援の必要性	8.5 ± 1.4	9.0 ± 1.1 a	8.3 ± 1.6 b

平均±標準偏差, a・b:  $p < 0.05$ , a: vs 人文系, b: vs 幼児教育系



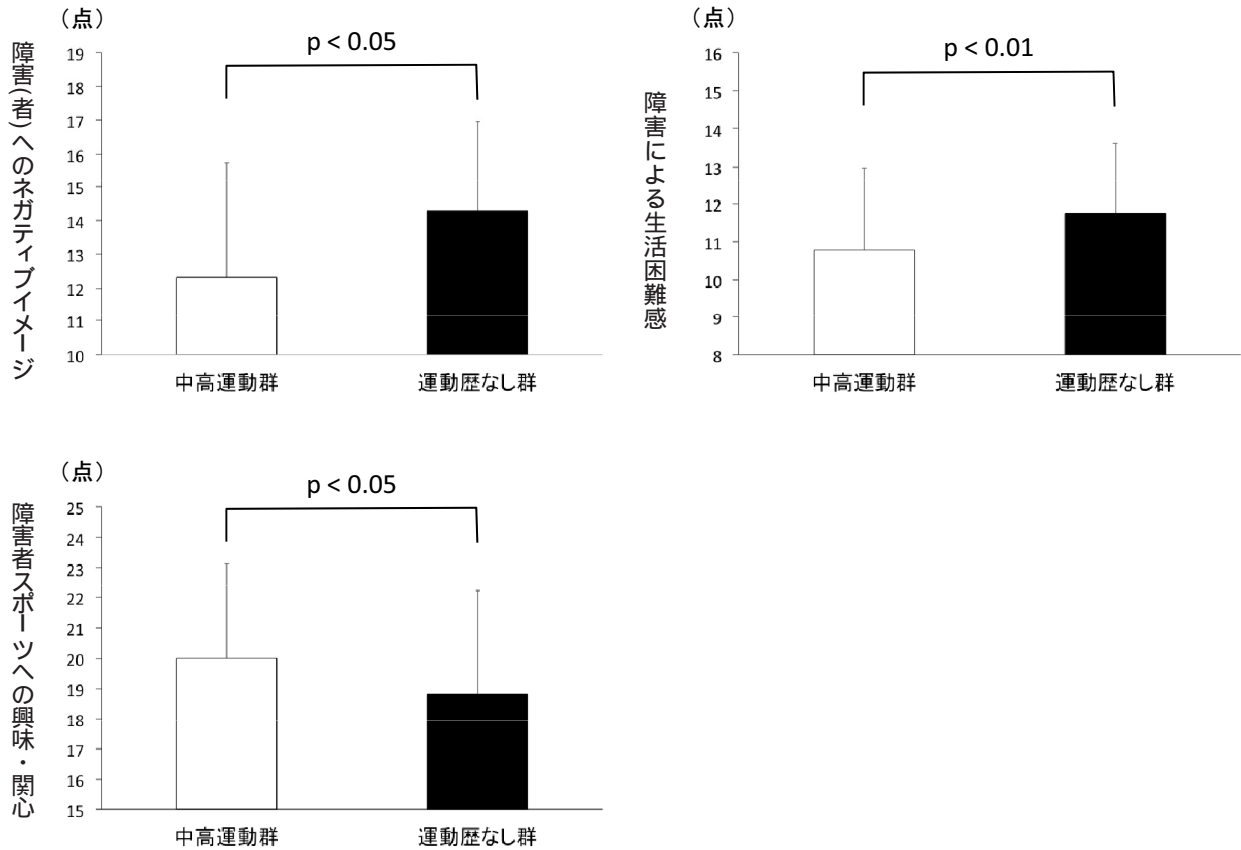


図1. 障害(者)および障害者スポーツに関する意識尺度における運動経験の影響

4) 障害(者)および障害者スポーツに関する意識尺度における運動経験の影響

運動経験の影響について検討するために、障害(者)および障害者スポーツに関する意識尺度において中高運動群と運動歴なし群との比較を行った(図1)。その結果、「障害(者)へのネガティブイメージ」、「障害による日常生活困難感」では、中高運動群が運動歴なし群よりも有意な低値を示し(それぞれ  $p < 0.05$ ,  $p < 0.01$ )、「障害者スポーツへの興味・関心」では、中高運動群が運動歴なし群よりも有意な高値を示した( $p < 0.05$ )。その他の項目で有意な差は認められなかった。

5) 障害者スポーツおよびアダプテッド・スポーツに関する知識・経験について

障害者スポーツを知っていると回答した学生は119名(70.0%)であったが、アダプテッド・スポーツを知っていると回答した学生は9名(5.3%)であった。表5に知っている障害者スポーツを示した。最も多かったのは車いすバスケの137名で、次いで多かったのは

車いすテニス38名、陸上競技38名、水泳24名であった。関連する競技を映像(TV・DVD)で観たことがあると回答した学生は113名(66.5%)、関連する競技に関する記事や情報を活字(新聞や雑誌など)で読んだり見たりしたことがあると回答した学生は70名(41.2%)であった。障害がある人と接したことがあると回答した学生は126名(74.1%)であった。これらの項目について学科別・運動経験別で検討するためにカイ2乗検定を行ったが有意な関係性は認められなかった。

表5. 知っている障害者スポーツ(人)

車いすバスケ	137	バレーボール	9
車いすテニス	38	スレッジホッケー	8
陸上競技	38	バドミントン	7
水泳	24	野球	4
サッカー	19	ハンドボール	3
卓球	15	ゲートボール	1
ゴールボール	13	柔道	1
車いすマラソン	11	ゴルフ	1
トライアスロン	10	ポッチャ	1

#### 4. 考察

本研究では、人文系、幼児教育系、体育系学科に所属する女子大学生を対象に障害者スポーツに関する意識について、専攻学科および運動経験の関係に注目して検討を行った。その結果、専攻学科に関しては、体育系は「障害（者）へのネガティブイメージ」、「障害による日常生活困難感」および「障害者スポーツ実施に対する効果認識」が低値を示し、幼児教育系は「障害（者）へのネガティブイメージ」、「障害による日常生活困難感」、「障害者スポーツ実施への心配」および「障害者スポーツ実施に対する配慮の必要性」が高値を示した。しかし、「障害者スポーツへの興味・感心」では、専攻学科間に有意な差は認められなかった。また、運動経験に関しては、運動経験が「障害（者）へのネガティブイメージ」、「障害による日常生活困難感」を低下させ、一方で「障害者スポーツへの興味・関心」を高める可能性が示唆された。

障害者スポーツに対する学生の意識について行った研究で、川田ら<sup>11)</sup>は社会福祉学科と産業情報学科の学生に障害者スポーツに対する質問紙調査を行った結果、社会福祉学科の学生の方が障害者スポーツを肯定的に捉えていることを報告している。また、大山ら<sup>5)</sup>はリハビリテーション系学生と人文系学生を比較し、リハビリテーション系学生の方が障害者スポーツの身体的効果に対する認識が高いことを確認し、その原因として専攻学科の特性を指摘している。これらの結果から、障害者に関する理解が深い医療・福祉系学科の学生は障害者スポーツを肯定的に捉え、その効果も高いと認識していることが考えられる。しかし本研究では「障害者スポーツ実施に対する効果認識」において、障害者理解に関する科目を履修している幼児教育系学科の学生と一般的な人文系学科の学生との間に差が認められなかった。星野ら<sup>8)</sup>は、スポーツの心理的効果に対する大学生の意識水準を検討した結果、女子の方がスポーツ場面を通じた協同、やさしさや思いやり、援助などの社会的価値ある行動などを表す「向社会性」が高いことを、また、加藤<sup>7)</sup>は高校生ではあるが、女性の方が高齢者・障害者と関わった経験が多く、高齢者・障害者に対する関心や援助意欲、福祉に対する学習意欲が高いことを報告している。さらに、女性の方が障

害者スポーツの効果を高く意識しているとする報告もあり<sup>5)</sup>、これらのことから、女子学生を対象とした本研究は、元来「障害者スポーツ実施に対する効果認識」が高く、専攻学科の特性として幼児教育系学生と人文系学生との間に差異が認められなかったと考えられる。一方、体育系学生は人文系および幼児教育系に比し効果認識は有意な低値を示した。丹所ら<sup>9)</sup>は、視覚障害者のスポーツに関して社会福祉学科と体育学科の学生に質問紙調査を行った結果、マラソン、サッカー、バレー、野球のどの種目においても体育学科の学生は社会福祉学科の学生と比べて、障害者は「行えない」という回答比率が高く、「工夫すれば行える」という回答比率が低かったことを報告している。体育系学生は幼少期から競技力向上のために強く激しい運動を繰り返してきている者が多い。体育系学生は、障害者は健常者が行うようなスポーツは行うことが難しく、また、障害者が行える程度のスポーツでは顕著な効果が望めないと考えていることが示唆された。

本研究では「障害者スポーツに対する興味・関心」において学科間の差は認められなかった。澤江ら<sup>12)</sup>は、アダプテッド・スポーツ活動への関心を高めるための教育内容に関する質問紙を用いて、体育専攻学生と非体育専攻学生を比較している。その結果、アダプテッド・スポーツ活動への関心は、両群間に有意な差が認められなかったことを報告しており、この結果について、アダプテッド・スポーツ活動への関心は、「スポーツ」からの側面と「障害」からの側面が存在する可能性を指摘している。一方、金山ら<sup>13)</sup>は、障害者スポーツ論受講後のレポートにおける感想からではあるが、養護学校教諭を志す学生の多くは自らを指導者の立場に想定して障害者に対する指導を身近に感じ、体育専攻の学生は、その場の雰囲気や障害者スポーツそのものに興味を抱いていることを報告しており、専攻学科によって障害者スポーツに関する興味や関心に対するアプローチに独自性があることが考えられる。本研究でも、運動経験が豊富でスポーツに関心が高い体育系学生と、障害に関する知識を習得してきている幼児教育系学生との間に差が認められなかった。しかし、障害者スポーツへの興味・関心は中高運動群で有意な高値を示したことから、学科独自性の影響よりも運動経験が強く影響している可能性が高いことが考えられた。

本研究の幼児教育系学生の特徴として、障害者へのネガティブイメージや日常生活困難感が高く、障害者スポーツ実施に対する心配や支援の必要性を強く感じていることが認められた。川田ら<sup>11)</sup>は、高齢者や障害者に関する専門知識が高い社会福祉学科の学生は産業情報学科の学生より障害者スポーツ（シッティングバレー）は「むずかしい競技」であると感じ、健常者と障害者が一緒にプレイできる感覚は授業後に低下していたと報告している。幼児教育学科学生の多くは保育士資格を、社会福祉学科学生の多くは介護福祉士や社会福祉士を取得するため、障害や障害者支援に関する多くの専門的知識を習得してきている。このことが、他の学科の学生よりも、障害や障害者に対して真摯に考え、障害者スポーツを実施する場合にも、より慎重に対応する必要があると考えている可能性が示唆された。本研究では中高運動群で障害者へのネガティブイメージや日常生活困難感が低かったことから、実際の運動経験を高めながら障害者に対する認識や障害者スポーツに対する理解を深めていくことが重要であると考えられた。

本研究では、障害者スポーツを知っていると回答した学生は70.0%、アダプテッド・スポーツを知っていると回答した学生は5.3%であり、永浜<sup>6)</sup>の報告と同様にアダプテッド・スポーツに対する認知が非常に低い結果となった。知っている障害者スポーツ種目についても、多い順から車いすバスケ、車いすテニス、陸上競技、水泳などで、先行研究<sup>6, 14)</sup>と同様の結果であった。パラリンピックに代表されるような障害者スポーツの国際大会が多くのメディアで報道されるようになり、障害者スポーツそのものの認知は上がってきているようである。しかし、冒頭のインクルーシブ教育につながるアダプテッド・スポーツの概念は理解されていない。障害者スポーツへの興味・関心や効果認識を高めるためにはもちろんのこと、ルールや道具を工夫しながら障害者や高齢者を含めたあらゆる人が一緒にスポーツを楽しめるというアダプテッド・スポーツの概念を普及させていくためには、やはり体験型授業の実践が効果的であり<sup>11, 15, 16)</sup>、大学体育においても積極的にこれらの障害者スポーツに関する体験型授業を導入することが重要であることが示唆された。

## 参考文献

1. 文部科学省初等中等教育分科会：共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進, 2012
2. 長曽我部博：インクルーシブ体育における「まさつ」が子どもの相互理解に及ぼす影響, 障害者スポーツ科学 4:37-46, 2006
3. 草野勝彦：改めて体育の可能性を問う - 体育でノーマライゼーションの具体化を -, 体育科教育 51:10-13, 2003
4. 丹所忍, 望月珠美, 徳田克己：障害者が行うスポーツに関する保育学科学学生の認識 - 視覚障害者が行うスポーツを中心として -, 日本保育学会大会研究論文集 50:936-937, 1997
5. 大山敬子, 金壽子：障害者スポーツに対する大学生の意識調査, 明治学院大学大学院文学研究科心理学専攻紀要 5:17-25, 2000
6. 永浜明子：「アダプテッド・スポーツ」「障がい者スポーツ」に対する大学生の認知度および意識レベル - アダプテッド・スポーツ導入に向けた授業自己評価の観点から (第 報) -, 大阪教育大学紀要：第 5 部門・教科教育 61:47-60, 2013
7. 加藤聖子：高校生の福祉意識, 藤女子大学 QOL 研究所紀要 2:55-63, 2007
8. 星野敏男, 後藤肇：スポーツの心理的効果に対する大学生の意識水準 - 体育実技における意識の因子構造とその比較 -, 明治大学教養論集 301:35-54, 1997
9. 丹所忍, 徳田克己：障害者スポーツに関する大学生の認識 - 視覚障害者のスポーツを中心として, 障害理解研究 1:61-66, 1996
10. 永浜明子, 藤村弘子：アダプテッド・スポーツ体験による大学生の意識変化に関する事例報告 (第 報) - アダプテッド・スポーツ導入に向けた授業自己評価の観点から -, 大阪教育大学紀要：第 5 部門・教科教育 60:39-49, 2011
11. 川田公仁, 山本哲也：大学体育の授業における障害者スポーツの試み - シッティングバレーボールを用いて -, 研究紀要 5:111-122, 1999
12. 澤江幸則, 齊藤まゆみ, 柄田毅, 井田智之, 村上祐介, 牧佑耕, 荒川歩美, 中原陽子：体育専攻学生のアダプテッド・スポーツ活動への関心を高めるための教育内容について - 非体育専攻学生との比較を通して -, 障害者スポーツ科学 9:35-45, 2011
13. 金山千広：大学生に教えるべき障害者体育・スポーツの内容についての検討 - 奈良教育大学における「障害者スポーツ論」の実践報告 -, 医療体育 20:6-12, 2001
14. 保井俊英, 永田隆子, 濱屋桃子, 三上真二：「障害者スポーツ」に対する意識レベルについて - 障害者スポーツ中級スポーツ指導員資格取得に結びつけるためには -, 武庫川女子大学紀要：人文・社会科学編 56:127-131, 2008
15. 吉岡尚美, 内田匡輔：障害のある人と「障害者スポーツ」に対する体育学部生の認識の変化に関する調査 - 「障害者スポーツ演習」の試みと効果 -, 東海大学紀要体育学部 37:21-27, 2007
16. 藤田紀昭：障害者スポーツの授業が大学生の態度に与える影響に関する研究, 日本福祉大学社会福祉論集 108:45-54, 2003